
daynight

泉樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

daynight

【Nコード】

N0294M

【作者名】

泉樹

【あらすじ】

“天秤”の命により違法に不死の研究をしていた研究所の潜入捜査と実験体の殲滅に乗り出していた主人公。実験は未成功に終わったと思われていたが、最後の実験体は首を斬っても生きており…？

すいません後日改めてあらすじを編集します今のところはこれにてご勘弁ください。

追記…こちらの「daynight」は短編のほうと同じ題名で主人公は同じですが、設定などは著しく変えてるのでご注意ください

21.

序章

長い長い廊下を、俺はひたすら走る。主《あるじ》の趣味なのか、中世ヨーロッパの城を彷彿させる廊下だ。床の赤いカーペットは俺の足音を吸収する。採光のためにわざと近付けているのか、窓の外から見える月は不自然なほど大きい。その光を反射し、右手に抜いたままの日本刀“落椿《おちつばき》”の刀身は艶《あで》やかな光を宿し、俺の偽りの影は体の動きを忠実にトレースしていた。

扉が見えてくる。俺は走りを緩めず、“落椿”を構えた。扉が間合いに入ると同時に、俺は“落椿”を振り上げ、蝶番《ちょうつがい》を破壊した。左手でドアノブをつかみ、鍵ごとひっぺがす。室内に一歩踏み込み、殺風景な部屋に目を走らせ、捉えた人影に“落椿”を、

「ごめんな」

振り下ろした。確かな手応え。俺は振り返る前に部屋を飛び出し、また扉を探して走る。

もう何百回も繰り返した行動。

「……なあ、常世《とこよ》」

その反復に嫌気がさしたところで、俺は常世に呼びかけた。

「いい加減教えてくれよ。ここはどこだ？ 何が行われていた？」

これから君にはとある場所に行ってもらう。そこにいる存在

人間怪異、全てを殲滅《せんめつ》してきて。下された命令はそれだけで、なるべく急いでほしいからと、常世に半ば強引にこの場所に放り込まれたのだった。

おそらく、ここは普段俺達の生きる世界とは違う。月がこれだけ近ければ潮流に影響が出るだろうし、なにより、狭い、とても表現したらいいのだろうか、そんな不快感がずつつきまとう。おそらく、この世界には城と月しかない。窓の外から飛び出したが最後、生きては帰れないだろう。

「そうだね。そろそろ教えてもいいかな」

耳元のインカムから、女の子の声がする。異世界間でも声質までクリアに聞き取れるスグレモノだ。

「“天秤”に与《くみ》する研究者の権利と義務は知ってるよね？」

知っている。“天秤”に所属する研究者は、本来弾圧される怪異に関する研究が許可される代償として、二つの制約が課せられる。

一つ目は怪異に関わる研究は“天秤”指定の施設内で行うこと。二つ目はその全ての成果を、“天秤”に開示すること。

「なるほど？ 確かにまともな研究所には見えねえな」

“天秤”指定の研究所なら常世が直々にガサ入れすればいい。成果を開示しているなら、こんな異世界を創って研究所を隠す意味がない。

“天秤”非認可の研究所で成果を秘匿していれば怪しい研究をしていますと自己申告しているようなものだろう。怪異の研究なんて、全て怪しいと言ってしまえばそれまでだが。

「またそんなバカなことを誰が？」

「アレクシア女史。君の誕生にも一枚噛んでるよ。でもバカなことっていろいろはいただけないね。研究者っていうのは、常に探究心とリスクを秤にかけてるんだよ。今回は探究心が勝った。それだけさ」

研究者としての義務を放棄した相手を擁護するのは、常世なりの女史への礼儀かもしれない。

「悪かったよ。言い過ぎた」

面倒だったので、一步引いてその話を終わらせた。

「……で、何の研究をしたのかわかるのか？」

斬り捨てた実験体は、どれもこれといってヤバそうな雰囲気ではなかった。

「彼女本来の研究分野は変異 吸血鬼とか人狼とか、そんな人が人を超越する過程を研究してたのさ。だからかな、見てはいけない可能性ってやつが、見えちゃったんだろうね。一度熱弁をふるわれたよ。『不死の人間が怪異の存在を認識していれば、彼らが人

間に忘れ去られ、消滅することを恐れずに済むのでは？』ってね。

『そんなの僕が許すと思うかい？』って釘は刺したんだけどね」

「……ってことは、ここで研究してたのは」

「十中八九、不死の研究だろうね。正直なところ、ここまで本気でやってるとは思わなかったけど」

「……不死、ねえ……」

俺は人間が追い求めるもののワンパターンさにあきれた。人間ってのはどうしてこう、不滅の存在ってのに憧れるんだろうか。

「あれ、興味ない？ 君なら食いつくだろうと思って、この任務を持ってきたんだけどね」

「……どういう意味だよ」

「質問で返すのは認めたくないからかな？ 君の精神はもう限界に近いつてこと」

俺は奥歯を噛みしめる。ふざけんなよ。まだ限界なんかじゃねえよ。まだなにも成し遂げてねえんだよ。なのに死んでたまるか

そう怒鳴り返そうとした衝動と走る体にブレーキをかける。突き当りに出くわしたからだ。

そこにあつたのは他の扉とは趣の違う、両開きの二枚扉。

「この扉でラストか……？」

「ばいね。他の実験体も復活する気配はない。女史も多分逃げた。実験が成功した気配はない。ん、お疲れさん。ラストを処分したら脱出用の抜け道を用意するよ」

「そりゃありがたいね。残りわずかな命の俺を、きちんと出してくれるとは」

そう軽口をたたいて、俺は“落椿”で両側の蝶番を切断した。重力とわざと与えた衝撃に従って扉が倒れるのを待ってから、俺は最後の部屋へと踏み入った。

扉が両開きだけあって、他の部屋より少し広い。とはいっても調度品は質素だった。天井のランプに明かりはついていない。正面

の窓からは真逆の方角のはずの満月が顔をのぞかせている。他に調度品といえば、棚とベッド、あとは棚の上にはどうにも場違いに見えるブラウン管テレビ。電源が入っているが、映っているのは砂嵐だった。

その砂嵐をじっと見つめている女の子が、ベッドに腰掛けている。ビジュアル系なのかゴスロリなのか、その辺の境は俺にはよく判らないが、とにかく黒と白の入り混じる布地のドレスと革靴。長めのワンレングスは砂嵐と月の光を白く返している。こっちを向いてはいないが、多分瞳もドレスに合わせて色を落とされているだろう。着せ替え人形みたいだが、人工的に造られた人間であれば、髪の色も眼の色も顔もスリーサイズも自由にいじれる。

「全部見てたわ」

女の子の顔がこっちを向いた。瞳の色は予想通りの赤。パターン化された美しい顔と声。

いつの間にかテレビは砂嵐を垂れ流すのをやめ、どこかの部屋を映し出していた。両開きの扉があった空間と、その向かいにある窓、その両側から月の光が差し込む、矛盾した空間。扉側の光は俺の偽の影を切り出し、窓側の光は女の子のシルエットを切り出していた。

「私も殺すの？」

テレビの中の女の子が言った。

「……話が早くて助かるよ」

俺は“落椿”を中段に構える。

「恨んでくれていいぜ。呪ってくれてもいい」

女の子は静かに目を閉じた。俺はなるべく女の子を苦しめないように首を斬った。

その手応えがあまりにも異様過ぎて、俺はその場から飛びのいた。斬った。確かに首を斬った。刃が肉も骨も神経も分断する感触は手に残っている。一対一の戦いであれば勝利を確信していいはずだ。なのになんでだ？

なんで構えを解けない？ 全身の細胞が“まだ終わってない”と

叫んでる？

なんで

「痛いわ」

声がする。

「痛い痛い、ああ痛い。痛くて死んでしまいそう」

女の子の首は寸分ずれず、胴の上に乗っている。だが分断されている証拠として、首の真ん中あたりからぼつりぼつりと、赤い点が生まれ、やがてつながりあって線になっていく。

「恨んでもいいのよね？ 呪ってもいいのよね？ 存分にそうさせてもらうわ。でも、その前に」

緩やかに、だが確実に増えていく血は線を保てなくなり、滴《したた》っていく。

「手を貸してください？ 一人で動くと、首が落ちてしまいそう」

白黒のドレスと赤の首飾りを身につけた女の子は、まるでダンスに誘《いざな》うかのように、右手をこっちに向けて差し出したのだった。

怪異の研究所といっても、その多くは人間の病院や研究所をそのまま利用してたりする。怪異を解剖したり製造したりといった研究所は、本当に一部の人間、それこそ常世クラスでないとその所在は明かされない。生半可な知識を持った人間があそこの光景を目にすれば発狂するからそうならないように、との配慮らしい。

話を戻すと、それらの病院や研究所は絶賛稼働中だ。じゃあ怪異の研究はそこのどこで行われているのか？

異次元だったりする。

異次元の考え方は、レイヤーを想像するのが一番手っ取り早い。普段通り機能している病院の上にレイヤーを一枚かぶせる。そこでどんなことが繰り広げられていても、病院側には何の影響もない。

“天秤”の規律に反したあの研究所も、この世界を一枚の絵とみなし、その上にレイヤーを一枚かぶせて建てたのだろう。それは異次元を切り拓くとは比べ物にならない労力と技術が必要だ。一研究者にできるはずのないそれは、協力者の存在と研究が成功すると確信していたことを裏付ける。現に最後の女の子は、首を切断したはずなのに、生きてしゃべってこつちに手を伸ばした。

一体誰が協力した？　なんて考えるのは俺の仕事じゃない。

俺の仕事は、“天秤”の殺意を代理すること。それだけだ。

「……………」

それだけのはずなのに、俺は無人の総合病院のロビーで、あの不死の女の子のことをだらだらと考えていた。

どの診察室へ向かう場合も、まずはここの受付を済ませる必要があるため、全ての患者が集まるこのロビーはとにかく広い。席も三桁はあるが、埋まっているのはこの一席だけ。受付カウンターも空っぽ。壁の液晶ディスプレイにはそもそも電気が通っていない。首をぐるりと回すと、ガラス張りの入り口の向こうには、ただただ真

つ黒な空間が広がっている。レイヤーは病院の上だけに張り付けているから、言うなればここは病院しか存在しない次元であって、その外は宇宙の外と同義になる。宇宙の外側なんて人間には知覚しようがなく目の毒でしかないから、とりあえず真つ暗な空間に見えるように常世が処理したらしい。それだけだと異次元も異世界も同じじゃね？ とか思うが、常世いわく、要はこの世界の内側に空間を作るか外側に作るかの違い、らしい。要はとか言ってるが、それで理解できる奴っているのだろうか？ 俺は理解できない。

「赤川さん。赤川粋さん」

首を戻すと、さっきまで空っぽだと思っていた受付に、一人だけ女の子が座っていた。

黒髪は短めのシャギーカット。黒眼には黒縁眼鏡。カウンターに隠れて服装は見えないが、いつも白のカッターに黒のスラックスなので、今日もそうだろう。初対面ではほぼ男だと思われるが、自己申告では女だ。

「……んだよ、普通に呼べばいいだろ」

俺は常世のもとへ向かい、開口一番に不平を述べた。こいつはどんな時もユーモアというものを欠かせない。

本当に、どんな時も。

「どうしたの？ 化け物でも見たような顔してるよ？」

俺は声を荒げた。

「化け物ならいくらでも見てるつての！ 不死だぞ不死！」

常世は人差し指を口の前に立て、“静かに”のジェスチャーをした。

「ここは元の世界に大分近いからさ、あんまり騒ぐと、あっちでラップ現象とか起きたりするから、静かンしてよね」

「そりゃまた随分な手抜きだな」

「まさかあんなに完成度の高い個体がいたとは思わなかったからね。他の研究員のいる施設に連れ帰るのもマズイし」

その言葉で、自分が見たものは幻覚じゃないと改めて思い知らさ

れた。

「……やっぱり不死だったんだな、あいつ」

ところが、常世は首を縦には振らなかった。

「不死っていうのを厳密に定義すると、そこからは外れるけどね」

常世は思わせぶりの言い方だ。

「どういう意味だよ？」

「……君は“不老不死”って、どう定義する？」

俺は腕を組んだ。

不老不死？

「年を取らず、怪我や病気で死ぬことがない」

「それだと単語をそのまま読んだだけだよ」

常世は指を組んで背もたれに体を預けた。

「老いない、って状態には二種類あって、細胞そのものが老化しないか、プログラムされてる細胞分裂の回数が制限されていないか。

同様に死なないって状態にも二種類ある。死の要因をそもそも受け付けないか、死の要因を上回る生命力を持つか。でも、彼女はどの属性も持っていないかった」

それがどういうことか、俺にはうまく理解できなかった。

「結論から言おうか。彼女は不死じゃない」

その言葉の意味は一瞬で理解できたものの、腑には落ちなかった。

「……おい、ちょっと待てよ」

俺はなぜか気が遠くなつて、カウンターに両手を置いて支えにした。

「ってことはあれか？俺が見たこととしたことは、全部夢幻でしたって片づけちゃうのか？」

「落ち着きなよ。君が見たものは全部真実だから」

「じゃあ」

まくしたてようとした俺を制止するように、常世は手を俺の顔の前に立てた。

「まあ黙って聞きなよ。君が探してる答えはもう見つかってるから

さ」

「……わかった」

俺も常世も、元の姿勢に戻る。

「君が彼女の首を斬ったとき、彼女は首から血を流して『痛い』と言った。これはものすごくおかしいことなんだよ。首を切断されれば人は死ぬ。けど彼女は生きていた。それは不死に他ならないということになる。でも彼女痛みを訴えた。でも痛覚は生物が死の要因を把握し避けるための機能なんだから、不死であれば必要はないはず。けど現実には、彼女は首を切断されても生存し、痛いと言った。

君が持っている情報だけだと考察できるのはここまでだから、混乱するのはわかるよ」

常世はイスから立ち上がった。

「ここから先は、君から引き渡された彼女を、僕が調べた結果を加えた考察と結論だ。ここじゃなんだから、少し場所を移そうか」

そういうと常世は、受付から出て脇の通路を進んでいく。俺もその四歩後ろに従った。

「彼女の許可をもらって色々調べてみたよ。まずは身体構造。これは人間と全く変わりがなかった。細胞単位では、人間と同じように古い、死ぬ。これで少なくとも彼女に彼女に不老の要素はないわけだ。では不死はどうだろう？　と考えると、僕は彼女にあるお願いをした」

やがて診察室の並ぶ通路を抜け、入院用の病室の並ぶ病棟に入る。

「『後で治してあげるから、その首、ちよつと外してもいいかな？』ってね」

「……………」

なんでそんなむごいことを、と責める資格は、俺にはない。

「彼女はそれを承諾した。だから僕は彼女の首を外してみた。どうなったと思う？」

答えを予想しかねていると、常世は立ち止まってくるとこちらを向き、にやりと笑った。

「死んだよ」

「……死ん、だ？」

ありえない。おかしい。首を外すと死ぬのなら、首を斬った時点で死んでいたはずだ。いくら寸分違わず胴の上に乗っていても、気管も延髄も分断されているのに。

「おかしいと思っただろ？ その通りだよ。でもね、本当におかしいのはそこじゃない。“首を外したら死んだ”ところじゃなくて、“首を外すという自殺に等しい提案を、彼女が『首を治す』って条件でのんだ”ところさこれがどういう意味かわかるかい？」

首を治すという条件付きで、自殺してくれと言われているような頼みをのんだ。それは彼女にとって、死のリスクよりも首が治るというリターンのほうが大きいということだ。首よりもちっぽけな死。ちっぽけな死？

「……首さえ治れば、生き返る確信があつた？」

「生き返る、とは少し原理は違うようだけど、概《おおむ》ねその通りさ」

常世は踵《きびす》を返し、また病棟を進む。

「首をちゃんと治すと、彼女の体はまた生命活動を再開した。そして目を開けた彼女はこう言ったのさ。『ああ、苦しかった』って」

ああ、苦しかった。

その言葉は、死んでもなお意識があつたことを意味する。

「結論を言おうか。彼女の不死はとて不完全なものだ。もはや呪いと言つてもいい。言つてしまえば“死んでも死にきれない”って状態だね。体が死んでも、魂が死を認識しないから、体は死を魂に認めさせようと苦痛を発し続ける。」

体が老いて衰弱しきつたら、一体どうなるんだろうね？ 体が朽ち果てる痛みを永遠に味わい続けるんだろうか？ 君はそんな彼女の首を斬っちゃったわけだ。首を斬られたときの彼女の絶望は、どれほどのものだったろう？」

何がそんなにかしいのか、常世の楽しそうな口調は留まるとこ

るを知らない。

「そして」

常世は病棟一階、一番奥の病室の前で足を止めた。

「そんな彼女が、君に会わせて欲しいってさ。僕としては断る理由はなかったから、こうしてここまで連れてきた。けど会うか会わないかの判断は、君に委ねる」

「……………」

常世が移動を始めた時点で、どうせまた何か企んでるな、とは思っていた。

「どうする？」

「どうする、ね。」

この扉を叩けば、何か面倒なことが、確実に始まる。

けど、命令したのは常世だが、手を下したのは紛れもなく俺だ。

だったら会うか会わないかなんて選ぶ権利は、俺には最初からない。

「決まってるだろ」

俺は扉を叩き、「どうぞ」と入室の許可をもらってから、部屋の中に入った。

不完全な不死を収容している病室、といっても、備品などに目に見える違いはない。ただ一応捕虜扱いの彼女を収容しているので、目に見えない形で包囲網を張り巡らせているはずだ。

個室らしく、ベッドは一床。

「突っ立ってないで、座ったら？」

そのベッドの主は、傍らのパイプ椅子を指差した。拒否する理由などあるはずもなく、俺はそのそとそこに腰掛ける。

一般的な入院着では似合わないと言世に判断されたのか、髪の色と同じネグリジェを着せられている。首のちょうど真ん中あたりには、地肌から明らかに浮いた色濃いかさぶたに覆われた傷跡が、くつきりと残っていた。

「……残したんだな、傷跡」

常世なら痕も残さず治療するなど簡単のはずだ。

「ええ。あなたがこの傷を見るたびに、自分がしたことを思い出せるように。まるで首輪みたいね？」

かさぶたに触れながら、彼女はそう言って笑う。そのかさぶたの色濃さは彼女の怨恨の深さを物語っているようで、それは“お前を許さない”という意志を否応にも俺に思い知らせるのだった。

なら、飼われているのはむしろ俺の方だ。

「……………」

「……謝らないのね。他の皆には、謝りながら斬っていたのに」

彼女以外の実験体のことを言っているのだろう。

「謝って、それで許されるのか？」

「じゃあ事前に謝ったら殺してもいいの？　それで許されるの？」

「……………」

反論できない。そもそも斬る前の謝罪も、殺されるいわれのない相手を殺さなくてはならないときにほとんど無意識に言うようにな

ただただ。任務と倫理の板挟みに苛^{さい}まれて、そこから逃れるために口に出す言葉。

いつからだ？

いつから俺は、殺すことを罪と感じるようになった？

“天秤”の殺意を代理するだけの、この俺が？

「殺す前に謝ること、これは任務で仕方なくしていることだ、こっちも被害者だ、と訴える。殺してしまえば相手は何も言えない。だからそれで許されたような気分になる。……とんだ卑怯者ね、あなた」

「……卑怯者、か。確かにそうだな」

「ごめん、と謝ったところで、許さない、と返ってくるに決まっている。その言葉を聞く前に斬り殺すことで、いいよ、と許してくれたいかもしれない、という選択肢を強引に作り、それを選び取ることで、勝手に救われた気分になる。」

これが卑怯でなくてなんだというのだろう。

……いや、それだけじゃない。

本当に卑怯なのは、誰かにそう言われるまで、それは卑怯だと認めなかったことだ。

「ねえ」

す、と彼女が俺の右手を取ったことで、俺は我に返る。彼女はそのまま、首のかさぶたに俺の指をあてがう。ぷくりとわずかに盛り上がったかさぶたのざらりとした感触が、指先から伝わってくる。

「あなたは感じたことがある？ 首と胴を斬り分ける刃の冷たさ。少しずつ気管に染み入ってくる血でむせそうになって、でもむせたら振動で首が滑り落ちて“死にっぱなし”になってしまう恐ろしさ。少しずつ脳に酸素が足りなくなっていく苦しさ。……あなたには解る？ 死ぬほどの痛みから死んでも解放されない、文字通りの永遠の苦しみに苛まれ続ける私の気持ちか」

解るはずがない。誰にも死んだ後のことはわからない。ただ死の先に何が待ち受けているかわからない恐怖はあれど、死の先にその

死の原因となつた苦痛が約束されている苦しみなど、解るはずもなかった。

「あなたを許さない。死んでも恨み続けるわ。……でもね、少しだけ、感謝もしているの。あなたが首をものすごくきれいに斬つてくれたおかげで、首を支えていればどうにか生きていられた。あなたはそんな私を不死の実験の成功体と勘違いして、研究所から連れ出してくれた。ここで首を治してくれたから、私はこうして死にそこなつて、あなたに生きたまま呪詛を吐き続けられるんだもの」

……ああ、そうか。

あの時俺が首を斬つて落としていれば、彼女はこうして生き残つて、俺に呪詛を吐きかけることもできなかった。鎮まらない痛みと息苦しさに蝕まれ続けながら、俺に届くはずのない呪いをかけ続けることになつたのだろう。

「……どうすればいい？」

それはなんだかととも、悲しいことのような気がした。

「どうすれば、お前の恨みを晴らしてやれる？」

人間も怪異も、もう数え切れないほど殺した。今更、一人の恨みを晴らしたところで、大して変わらないのは解つてる。

それでも俺は、救われたいんだ。

殺すだけの、“天秤”の殺意を代理するだけじゃなく、その気になれば誰かを救えるんだと、大手を振つて地獄に堕ちたいんだ。

そんな俺を彼女は、ふふ、と笑った。

「なあに？ 私が願つたら、一緒に死んでくれるっていうの？」

「……お前が望むならな」

常世には許可なく死ぬことを禁じられているが、精神の限界が来れば、そんなのはもう関係ない。

「願い下げね。そんなの、何の解決にもなつてないじゃない」

彼女は首を横に振る。かさぶたがかりかりと俺の指の腹を擦った。「生きることへの未練は別にないわ。生きてても、痛くて苦しいだけだもの。でも苦しみなから死ぬのは嫌。安楽死も嫌。あれ実は後

々苦しいのよ？」

どうやら体験済みらしかった。

彼女は身を乗り出し、俺に顔を近づけた。

「私を殺して。やさしく、微塵の痛みもなく、安らかに。出来るでしょう？　いくつもの命を奪ってきたあなたなら、たった一つの命を苦しめずに奪うことぐらい」

俺は殺すことしかできない。

「……わかった」

だから、殺すことで救うというのは、どこまでも皮肉な話だった。
「どうしたらいいか皆目見当もつかねえけどさ、約束するよ。お前の不死の呪い、必ず解いて、安らかに殺してやる。……」

そういえば彼女の名を知らない。実験体に個体名がつけられていたかは知らないが、一応聞いてみた。

「名前とかつてあるか？」

彼女はしばらく口をつぐんでいたが、やがて、

「Tuesday dernier」

「……チュ、エル……？」

予想のはるか真上に行く返答に、俺は思わずポカンとした。

「“あなたが最後”。フランス語でそういう意味よ。私であることが特定できそうな単語はその最後、デルニエだけ。だからデルニエでいいわ。ふふ、我ながら変な名前ね」

「いい名前じゃねえか。“粹”^{すい}なんかより、よっぽどな」

粹とは優れているもの。純粋とは混じり気のないこと。

どちらの意味を取っても、俺には名前負けなことこの上なかった。

「……ありがとう」

デルニエはそう言う俺の手を離し、姿勢を元に戻した。これで話は終わり、という意味だろう。

俺はイスから立ち、部屋から出ようとドアノブに手をかける。

「別に急かしはしないわ。けど、私が老いて朽ちる前をお願いね」

そのデルニエの声を背に、俺は病室を後にした。

「今まで斬ってきた者達の怨みは目をつむって、目に見える怨みは取り除くのかい？ 僕にはそっちの方が卑怯に思えるね」

病室から出ると、正面のガラス窓の枠にもたれかかって立っている常世が目に入った。病室からは二メートル程離れているが、こいつのことだから余すところなく盗み聞きしていただろう。

「……んだよ、罪を償うことも許されないのかよ」

「贖罪の意味合いが違うつて言ってるのさ。本当に償いたいのなら、自分のしたことを帳消しにしようとせずに、潰れるまで全部背負いなよ。君のその贖罪ってのは、僕にはどうも自己満足のようにしか聞こえない」

そこまで言ってひとしきり空間の温度を下げたところで、常世は肩をすくめた。

「ま、僕は君のサポーターかつ観察者であり指導者じゃないから、君のすることに口出しはしないよ。茶々は存分に入れさせてもらうけどね」

自分の言いたいことは言ってこっちの言動を否定しておきながら、直後には君の勝手だと突き放す。

俺はこいつが大嫌いだ。

「……………。常世」

でも役には立つ。深呼吸を一度挟んで気分を落ち着け、話を切り出した。

「あいつの処遇はどうなる？」

その問いが来ることは解り切っていたとでも言うように、常世は口の端を歪めた。

「それは君もよく解ってると思うけど？ “天秤” が不死をどう扱うか」

“天秤” は、それがどんなに不完全でも、不死の存在を許しはし

ない。それはいつか必ず滅びるといふ人間の在り方と矛盾するからだ。だから“天秤”は不死の存在を何が何でも抹消しようとする。死なないなら死んだも同然の状態にすればいい。何も無い異世界に放り出すとか、精神の方を腐敗させるとか。

でもそうせずにデルニエをここへ運んだのは、あいつにまだアレクシア女史を引き寄せる餌の役割を期待しているから。“あなたが最後”なんて実験台に言ったんだ、デルニエが女史にとって不死に一番近い存在、もしくはそれに至るための布石である可能性が高いなら多少のリスクを侵してでもデルニエを回収しにくる、とでも踏んだのだろう。

「ならこの一件、俺に任せちゃくれないか？」

つまりはアレクシア女史の身柄を拘束すれば、デルニエを生かしておく意味はない。彼女の望みを成就させるためには、まず彼女を生かす意味をなくさないといけない。

「それは構わないけどさ、この件は僕が独断で動いていたのを、君が引き継ぐ形になる。だから“天秤”のサポートは一切ないよ。それでもいいの？」

「別にいいさ。要はあいつが朽ちる前に完遂すりゃいいんだからな。気長にやるさ」

デルニエの寿命が人間と同じぐらいで、彼女の年齢を十代後半と仮定するなら、タイムリミットはおよそ七十年。俺とあいつの根気さえ続けば、なんとでもなる。

「期限の心配はないけどさ、彼女の不死を解くアテはあるの？ それがつかめないと、何年経っても一緒だよ？」

「……………」

俺が答えに詰まったのを見て、常世は嘲笑した。

「教えてあげよつか？ 彼女の不死を一発で解く方法」

「……………何だよ？」

何となく嫌な予感はしながらも、俺は一応聞いてみた。

「簡単だよ。彼女を喰べちゃえばいい」

めぎんつ。

コンマの壁をぶち抜いて二メートルの距離を詰め、常世の顔面めがけて繰り出した俺の拳は、常世がもたれかかっていた窓枠を上下二つにちぎり飛ばした。両サイドの窓は木っ端微塵にわれ、拳の衝撃はもう一つ外側の窓枠も歪ませ、窓ガラスに大きなクモの巣を張った。

「相も変わらず沸点低いね。僕言ったよね？ あんまり騒ぐなって」さっきまでいた位置から拳一つ分だけずれた所に、ガラスを被ることもなく常世は立っていた。

「冗談で言っただんじゃねえよな」

醒めきった心とは裏腹に、腹の中では熱をもった何かが、下卑た^{げひ}笑いを浮かべてひしめいている。

こういう時、俺は自分が人間の面を被った化け物だということを、思い知らされる。

「もちろん本気だよ。冗談だと思ってたら本気で当てにきてたでしよ？」

本気で狙ったとしても、こいつには当たる気がしない。

「他に手がなかった場合の最終手段、ぐらいには考えておいた方がいいよ。ま、出来損ないとはいえ、不死を喰べるんだ。それなりの悪影響は覚悟しておいた方がいいね」

「悪影響？」

「少なくともメリットはないってこと。不死は甘美なものって幻想を持つてるなら、なかなかの地獄を見ることになるだろうね」

「……地獄、ね」

俺はデル二エのことを思い出す。死んでも生への望みを捨てることを許されず、体は死の痛みを訴え続ける。

あそこが地獄でないとしたら、はたしてどこに地獄はあるのだろう。

「『贖罪^{しよくわい}（笑）』もいいけどさ、“天秤”本来の職分も忘れないでよね。明日から“祭り”だよ」

「……へいへーい」

祭りか。全く嫌な行事だ。

「君も一旦部屋に戻って準備しなよ。今回は実質、君一人なんだからね」

俺は返事がてら手を仰いだ。常世も廊下に異次元への真つ黒な扉を作り、常世直轄ぢよっかつの研究所しか存在しない次元へ消えた。

さて、俺も戻るか。窓も常世の気が向いたら直すだろう。

「……ああ、そうだ」

帰ろうとした俺の前に、異次元の扉から顔だけ出した常世がいた。生首が浮いてるみたいで気持ち悪い。

「君のやる気煽りを兼ねて、ちよつとだけマジレスしてあげよう」

「日常会話でマジレスとか使つな」

「彼女はいわば“死”という概念が欠けた状態だ。だから死に至るための苦痛というステップまでしかない。彼女を死なせようと思うのなら、彼女の欠けた“死”を埋める何かを探すのが一番手っ取り早いんじゃないかな」

俺の苦情を当然のように無視して、常世は話を進めた。

「欠けた“死”を埋める何か……？」

「そこからは自分で考えなよ。あんまり手取り足取り教えても、君の成長にはつながらないしね」

そう言いたいことだけ言うと、生首は今度こそ姿を消した。

「……………」

あの言葉はあいつなりのエールと受け取っておこう。そう思わないといちいち付き合ってられない。

次元同士をつなぐ扉になっている正面玄関を抜けると、無人の静寂に慣れた耳に街の喧騒が押し寄せ、初夏の日光が肌を焼く。

「……………」

病院の前にしては、どうも騒がしすぎる。とくに、その音源のほとんどはむしろ静かにするべき病院の内部から聞こえてくる。

どうやらいきなり窓枠が吹っ飛んだとかで、大騒ぎになっている

らしかった。

1 - 3 (後書き)

これにて起承転結の起が終了です。

私の腕をつかむ手の感触は人のものとは思えないほど毛深くごわごわとして、気持ち悪かった。

御前を蒐集する。そう言うのはお坊さんが着る袈裟に、お祭りの屋台によく並んでいる、狐の仮面をかぶった変な人。

私たちが今いるのは、文字通り、祭りで賑わう通りの真ん中。狐のお面をかぶったお坊さんが女子高生の首に手をかけている、という異常な状況なのに、行き交う人々は騒ぐどころか気づく様子さえない。

そのまま持ち上げられても、私は苦しそうにするだけ。

頑張れば助けてと叫べるかもしれない。もつと頑張れば、腕に爪を突き立てて逃げるチャンスを作れるかもしれない。

でも、しない。

何も出来ないんじゃない。

何もしないだけ。

ただ、やっと“私の番”がきただけだから。

「……………」

持ち上げられて視点が上がったことで、近くの家屋根の上に立つ人影が目に入る。

ああ、あれは。

男の子にしては背が低くて、あまり学校に来なくて、たまに来てもつまらなさそうに席に座ってるだけのクラスメート。

彼は私と目が合っているのに、助けに来るでも騒ぐでもなく、ただじっと私を見ていた。

だから私は力を振り絞って、彼に手を

2 - 0 (後書き)

2 - 1 にはあまりに短かったもので話目といつとゞ。

屋根から屋根、時に雑居ビルの屋上へと、俺は“落椿”片手に跳び移る。通りを見下ろせば、両端を明色に彩られた屋台が埋め尽くし、中央は普段着や学生服、浴衣に甚兵衛じんべえなど思い思いの服装の見物客が、行き交うというより、もはやひしめいている。そんな様相が、主催の神社を中心に半径二、三キロは広がっている。

さんのうまつり 山王祭と名のついた祭りは全国に点在しているが、この界限においては出店の数は約千、三日間通しての見物客の数は約二十万人と、最大規模を誇る祭りの名前だ。

普段ならどうやっても集まらない数の人間がこの地域に密集し、それによる経済効果を期待した商人達が、様々な物品を持って出店を開く。

そうして集められた物品の中には、少なからず“いわくつき”なんて物が混じってたりする。

視線を通りから上に。

遠くにちらほらと、俺と同じように屋根や屋上を跳んで移動する影を捉える。

そのうちの一つが通りの方へと降りて行ったので、俺もその通りへ向かう。

途中何度か通りを跳び越えるが、騒ぎが起こる気配はない。

きらびやかな屋台の灯りに目がくらんで、人間達は気付かない。

自分達の頭上を跳梁跋扈ちようぼうこくごする者達の存在を。

この祭りの本当の意味を。

影が下りた通りに到着したが、通りには下りずに屋根の上から様子をつかがう。ほとんどの人間が双方向に流れ、いくつかのグループがそこから外れ、屋台の間にできた空間で休んでいる。

そのグループの中に、明らかに異質なものが一つ。

ここからだと背後しか見えないが、坊主頭の後頭部に紐が結えて

あることから、その坊主がお面をつけていることと、袈裟の袖から伸びた黄金色の毛に覆われた腕から、その坊主が監視対象であることが判断できる。

化け狐。

彼等は一年のうち山王祭の催される三日間のみ、狐の里から人里に出て、この世に二つとない珍しいものを集め、姫の慰めにと献上する。

たとえそれが人間でも。

狐坊主の腕は、女の子の腕に伸びている。長そうな黒い髪の毛の頭の両脇で結んだ、見覚えのあるブレザーの女の子。

道行く人は誰も脇の惨劇には気付かない。恐らくは幻術で蒐集対象ごと見えなくしているのだろう。

気付いている俺も、助けない。実際に人間を蒐集した前例もあるらしいし、“天秤”も蒐集される人や物に対し、救済措置を用意したうえでそれを認めている。

“天秤”はどちらにも与^{くみ}しない。あくまで両者の関係を均等に保つ。ぱつと見化け狐側を贖^{ひいき}しているように思えるが、年三日のみという期間の制限と、蒐集対象物への救済措置の容易で一応バランスはとれているのだ。見たところ女の子には連れはいなさそうだから、救済措置は適用できそうにないが、これは運が悪かったとしか言いようがない。

狐坊主はじらすように、女の子を持ち上げた。女の子の顔が苦しそうに歪む。

「……胸くそ悪いな」

思わず呟いた。さつさと連れて行かない狐坊主と、“天秤”が認めているからと言いついて助けに行かない自分に向けて。

その声が聞こえたかのように、女の子の目が俺の視線を捉える。

一瞬だけ動揺したが、俺はその視線を受け止め続ける。

さあて、どうするよ？ 悪いが俺は助けてやれない。

怨んでくれていいぜ。見殺しにするんだからな。

そう開き直りながら、俺はデルニエに指摘されても変わっていない自分の考え方に幻滅していた。

女の子は俺の方へと手を伸ばす。そのまま伸ばしきるのかと思っただが、手のひらを返して途中で止まる。そしてその手が、小刻みに左右に振られた。

まるで、ばいばい、と手を振るかのように。

「――！」

今度の動揺は、一瞬では抑え^{おさ}えきれなかった。
なんだ。

狐坊主に首をつかまれていて今にも窒息しそうで、その上どこか得体の知れないところへ連れ去られようとしているのに。

道行く人は誰も気付いてくれないのに。

唯一気付いている俺でさえ助けようとしないのに。

周りのもの全てがお前を殺そうとしている、そんな異常な状況なのに。

どうして俺に手を伸ばさない？

どうして手を振れる？

どうして、助けようとしない俺を怨まないでいられる？

「――っ！」

その理由が知りたくて、俺は屋根から二人の許に飛び込んだ。

「……何の用だ」

狐坊主の背後に降り立つと、傍観しているはずの“天秤”の手先が近付いてきたので、その声は不機嫌そうだった。

「これは正当な“御宝探し”である。貴様がしゃしゃり出る必要はなからう」

「そのことなだけどさ」

”落椿”をジーンズのベルト穴に通し、両手を上げて戦う意思はないことを示す。

「そいつ、俺の知り合いでさ。そのまま攫わせて、あんた達のお姫さまのおもちやにさせるってのは、どうにも寝覚めが悪そうだね」

「……………」

「だからさ」

狐坊主が無口なので話の続きを促しているのだと勝手に解釈し、本題に話を進めた。

「そいつはカンベンしてくれねえかな？ ……これは“天秤”とは

関係なく、俺個人の“お願い”だ」

「……………はっ」

返答は、一笑。聞く相手を嫌悪させる、嘲るような笑み。

「何かと思えば寝覚めが悪い？ 勘弁しろ？ お願い？ まるで人間のようだな、混ざりもの」

「……………んだと？」

腹が熱い。空腹の時に胃液が煮えたぎるような、食物を求める衝動的な熱さ。

笑い声が聞こえる。体の中から数え切れないほどの笑い声が、お前のことだと体中を反響する。

「認めぬか。ならば率直に言ってやろう」

狐坊主の後頭部がぐるりと百八十度回転して、本来あり得ない角

度から俺を見下ろした。

「人の感情というものを必死に真似ようとしている貴様は、滑稽で反吐が出ると言ったのだよ、混ざりもの」

その一言で、俺は理性で動くのをやめた。上げていた右手を“落椿”の柄に落とす。そのまま変則の居合斬りで狐坊主の銅をぶった斬ろうとして“落椿”を抜く手を強めた。

狐坊主の側はあらかじめ策を張っていたらしく、俺の右肘の辺りの空気が渦を巻いて変色していく。灰色に変色した空気は急速に形と質量を手に入れ、狼の頭を形成する。

頭だけの狼は俺の肘を噛み砕こうと口を開いた。背後からも、肘辺りのそれとは比べ物にならない規模の空気が渦巻いているのが感じ取れる。だがデカい分形成も遅い。これなら肘を咬まれ背後の獣に喰われる前に狐坊主の胴を斬り落せる　そう思ったのに。

俺の刃は狐坊主に届くことはなく。

狼の牙もまた俺まで届かなかった。

背後の空気も渦巻くことをやめた。

そして掌で“落椿”の柄尻を押さえつけ、左の掌を狐坊主に制止を促すかのように向けているのは、

「　なにやってるのさ、君達は」
常世だった。

2 - 2 (後書き)

3 か月近く放置してすいませんでした。手をつけていなかった期間もありましたが、話の区切りが見つからなかったためなかなか載せれずにいました。

3 か月たちこれはまずいと思ったので多少強引に切って載せています。違和感などありましたらすいません。

俺と狐坊主の間に潜り込むように、常世は異次元から現れたのだ
った。

「なっ……！」

「貴様は……！」

狐坊主は常世のことを知っているらしく、その驚きの声は、“お前は誰だ”ではなく“なぜお前がしゃしゃり出てくる”というニユアンスだった。

「あーはいはい、どっちも言いたいことはあるだろうけどね」

俺と狐坊主を制する声色は、ひどく冷たかった。

「とりあえず、動くな」

常世の顔には笑みすら浮かんでいる。だが、その冷やかな目は、本気で怒っていることを物語っている。今動けば、味方だろうが本当に殺される。

「……………」

狐坊主も力の差を知っているのか、おとなしく口をつぐんだ。二人が戦う意志を放棄したことを確認した常世も、両手を引いた。

「さて、僕としては、話し合う前に彼女を降ろしてほしいんだけど、彼女、苦しそうだし」

常世の“お願い”に大きな舌打ちを鳴らしながらも、狐坊主は女の子の首を絞める手を緩めた。

「っ……………」

足もつかない高さからいきなり落とされた女の子は、派手に尻もちをついて、酸素を補給しようとせき込みだす。

「“御縁比べ”だ、狐さん。こいつと君で、彼女をかけて」

常世は親指で俺を、顎で女の子を指した。

「……………罷り通らぬ！」

狐坊主は右腕を振って否定した。

「御縁比べ」は収集対象物がいずれかの人間の保有物であった場合のみ行われる。だがその女はどうだ？ その混じり物が女を所有しているという証がどこにある！」

“御縁比べ”それが“天秤”の定めた、収集対象物への救済措置。人間が欲しい物を合法的に手に入れる場合、店で売られていれば金を払い、個人が持つていれば譲ってくれるよう交渉する。それは化け狐であっても変わらない。収集対象物が人間であっても変わらない。

だから、人間を収集物とみなして否応無しに連れ去っては人間側に理不尽が生じる。かといって人間の収集を禁止すれば、今度は狐側が収まらない。

だったら勝負して決める。一見すべてを丸投げにしたかのような結論だが、実はこれが一番うまくいつているのだ。とは言っても普通に力比べをしては人間に勝ち目がないので、勝負の内容は人間側が決める。狐側は人間が使えない妖術の類を使用してはならないなど、バランスをとるための制限がいくつかある。

狐が言及しているのは、“収集対象物の所有者の問題”だ。ここでいう所有者とは、収集対象物を奪われて物理的または精神的な被害を被る者、人間の場合は家族や恋人だ。友人の場合はただの友人と親友の差などの判別が曖昧なので除外する。ちなみに収集対象物本人が所有者を兼ねることも可能だ。いつの時代も厭世感の強い人間や、違う世界に憧れる人間は存在するので、本人に直に交渉し許可が取れれば収集が可能になる。そのため相手の喉をつかみ発声が困難な状態にするというのは規律的にはグレーゾーンなのだが、常世がそれを引き合いに出す気配はない。きっと常世なりに考えがあるだろうから、俺は何も言わないで

「見せてやりなよ、粹」

常世は女の子を指差した。

「君と彼女のアツイ仲を」

2 - 3 (後書き)

また3か月も空けてしまい、申し訳ございませんでした…。

は？

疑問がそのまま口から洩れかけたが、突然首を絞められたかのよう
に息ができなくなり、今度は俺が咳き込んだ。

（呆けを声に出すな。涼しい顔してろ）

頭の中に直接常世の声が響く。要はテレパシーだ。俺の脳はテレ
パシーを受け取れるようには出来ていないので、こっちの頭にダメ
ージを与えながら無理矢理受信させているのだ。

仲を見せるったってどうすれば？

（キスとか愛撫とか色々あるだろ）

同様にこっちの考えも読める。

流石に初対面に近い女の子にそれはマズイだろ。

（え、君が常識を気にするの？）

驚きを含む口調で言われた。

（安心しなよ、一応彼女にも軽く説明したから）

どうやら女の子にもテレパシーをねじ込んだらしい。

なんて？

（“一切動かず、何をされても平然としてろ”）

どうりで女の子がさつきから動かないのは常世に後ろから根回し
されていたかららしい。

「ほら、いつもやってることだろ？ ギャラリーがいるだけじゃな
いか」

不自然な間を俺が恥ずかしがっていると強引にカバーして、常世
は俺の尻を叩いた。たたらを踏んだ俺は、どうすればいいのか上手
くまとめられないまま、落ちた時の体勢のまま座り込んでいる女の
子の後ろに回り込んでしゃがみ込んだ。

「……………」

試しに肩に手を置いてみた。置いたこっちが驚くぐらいに、女の子の身体がびくりと強張る。これじゃ何をしても恋人同士には見えそうにない。

（ポーズでいいから何かやれ。あとは僕が何とかするから）

何かて。

何をすればいい？ キスなら手っ取り早いが、相手がファーストキスだった場合取り返しがつかなくなる。それ以上のことを初対面の男にされたら心に傷が残るかもしれない。恋人同士だと認めさせられて、相手に傷を残しにくい方法、キスがやっぱり一番……、待てよ？

キスって口同士でする必要があるのか？ マークさえ付けばどこでも良くな？

これだ……？

「ごめんよ」

女の子の耳元が近かったのでそう囁き、返事を聞く前にブレザーの襟をずらした。

屋台の灯りに照らされて、女の子のうなじが露わになる。緊張と熱気で薄らと汗ばんでいる肌。甘い匂いがする。甘い匂い。甘い甘い匂い。女特有の匂い。芳しい匂い。思わず舌なめずりする。

その下に流れている血は、甘いんだろうか？ きつと甘い。味わってみたい。

俺は口を開いて、女の子の首元に歯を突き立てた。柔らかい肌に犬歯が食い込む。表皮が破れる。毛細血管や筋肉もろとも血管を喰い破ろうとしたのに、突然顎が動かなくなる。

「ご覧よ、年頃の女の子が、見ず知らずの男に肌を許すと思うかい？」

顎だけじゃない。手も足も動かない。舌さえも。たぶん常世が何らかの力で拘束しているのだろう。

「これでこっちは彼が所有物である証拠を示した。取り決め通り“御縁較べ”を行うよ」

今度は誰かに後ろから引つ張られるように女の子から引き剥がされ、地面に転がされた。

女の子から離されて、頭が急に正気を取り戻す。

どうしてあんなことをしようとした？ 女の子の血を味わいたかったから。

どうしてそう思った？ 女の子の血が甘そうだったから。

違う。人間の血が甘いはずがない。

冷静になってみると、何であんなことを思ったのか、自分でも解らなかった。

「……何だ、その三文芝居は」

人が落ち込んでいる間に、“御縁較べ”を行う話がまとまってい
ると思っただけでもなかった。

「滑稽極まるな。そのような芝居で認められるはずがないだろう」

「滑稽かどうかは関係ないよ。あの子が粹に肌を許したのは事実だ」

「ふざける」

「ねえ、狐さん」

常世の声が、一気に殺意を孕む。直接俺に向けられているわけでもないのに、その余波で夏なのに悪寒が走った。

「まさか取り決めに反故にするなんて言えないよねえ？ そのままだと“天秤”から粛清されるから、自分達から制限を申し出たの
ねえ？」

「……だがっ！ あの小僧は“御縁較べ”を介することなくあの女の解放を要求した！ その件はどうするつもりだ！」

「そりゃあ目の前で恋人がさらわれそうで、自分に助けられる力があつたら、助けに行くでしょ。逆に彼に感謝すべきじゃないかな。もし彼が止めに入らなかったら、所有者確認の怠惰から、自ら申し出た規律を放棄したとして、“天秤”が粛清を行っただろうしね」

俺は常世の鮮やかな屁理屈に舌を巻いた。こっちの行動を全て正当化しながら、相手の立場を追い込む。全ては“赤川粹は収集対象物の恋人である”という前提があつて初めて成立する屁理屈だ。

「……………」

二人の関係が何とも嘘くさいのは狐坊主にも分かりきっているの
だろう。しかし目の前で行われた上、一族の存亡が絡み出し
た以上、個の一存で押し切るわけにはいかなかったのか、狐坊主
は口を閉ざした。

「決まりだね」

常世が孕んでいた殺気が一瞬にして消え、代わりにしてやったり
とでも言いたそうな笑みが浮かぶ。

「じゃあ、“御縁較べ”の題目の話に入ろうか」

俺は常世の手招きに応じて立ち上がり、二人の許に戻る。

「じゃ、粹。君は何で勝負したい？」

何とも厭味な笑顔で、常世は俺に訊く。

さて、ここで少し考えよう。

化け狐というのは、基本的に人間を出し抜くのが大好きだ。その
ためなら多少の屁理屈も強引に押し通す。

なら、屁理屈をこねる隙間もないくらいガッチガチにルールを決
めてしまえばいい。そう結論付けてからさらに少し考え、そして提
示した。

「一対一の一騎打ち。武器は刀剣のみ使用可。妖術の類は一切なし。
相手を殺した方の勝ち。判定は一切用いない。違反などの判断は中
立機関の“天秤”から常世に下してもらう」

妖術の使用禁止は暗黙の了解のようだが、一応明言しておく。判
定を導入すると屁理屈をこねる余地が生まれそうだったので、殺し
た者勝ちにした。反則などの判断は常世に任せておけば理不尽が起
きることはないだろう。

「……では、時刻は間宵、処は日枝神社全域にて」

狐坊主はそれだけ告げると、これ以上ここにいたくないという意
思表示か、こっちの返事も待たずに、煙となって消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0294m/>

daynight

2011年5月22日23時27分発行